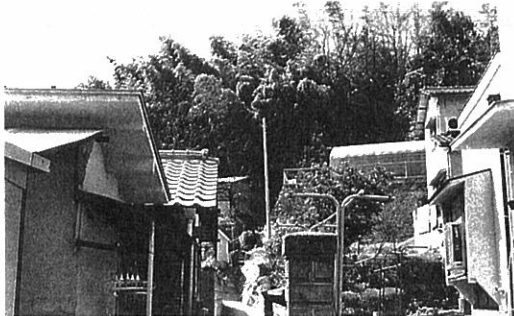
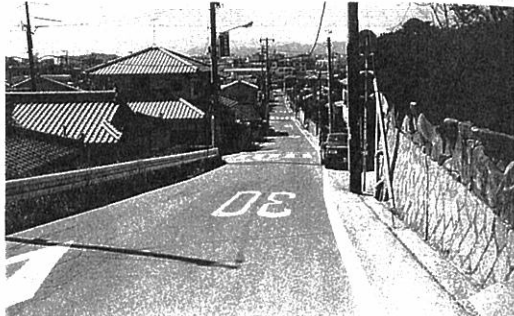




出張城跡



八幡馬場

3 府中町内

瀬戸ハイムの西側を八幡地区といい、甲越峠から麓に下りてきた道が通る最初の聚落であり、谷口集落的発達をみたところである。旧山陽道は府中中学校（昭和三十九年建設）の南側を通っていたと考えられる。府中中学校がある丘の西側の麓に松崎八幡宮跡がある。

松崎八幡宮は八幡別宮の別称のひとつで元暦二年（一一八五）の「頼朝下文写」によって、京都の石清水（男山）八幡宮の別宮として鎌倉時代以前から存在していた。

松崎八幡宮は多家神社の所在地の確定や祭神をめぐる総社との争いの結果、明治七年（一八七四）廃社となるまで、府中南部の氏神であった。

宮跡には境内に上る石段と「神武天皇腰かけ岩」といわれているものおよび大きな楠などの社叢の一部が残るのみである。石段下から西に向かっているまっすぐな道はこれがお宮の馬場（八幡馬場と呼ばれる）であったという。

旧山陽道はこのあたりで北にその向きを変える。

しばらく行くと、右手前方に樹木の生い茂った標高二五メートルほどの小山が見える。中世山城跡の出張城跡である。

この出張城は白井氏の居城であった。城の北隣りにある長福寺や城山の付近には、白井氏の「五輪の塔」が残っている。本丸のあった北側は、険しい崖であるが、南側は傾斜が緩やかである。

地元の人はこの山を「城山」という。

『芸藩通志』には「白井加賀親胤もと千葉氏なり、文明年間（二四六九～一四八六）、下総白井郡より府中村出張城に居たり」と載せており、「芸州府中荘誌」（一二二頁）には「胤時、応永年間（一三九四～一四二二）両国に下り、府中城（後の出張城）を築きてこれに住みし云云（中略）、親胤に至る八代百四〇余年間、白井氏の居城として出張城に住む」とある。

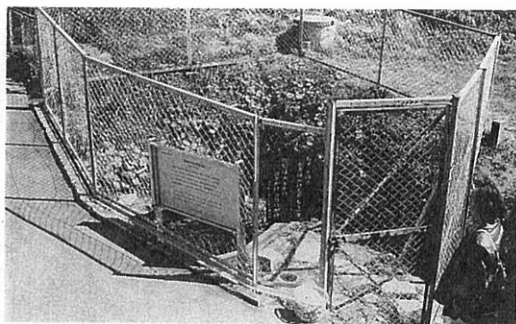
なお、この城跡の東麓にはこの城に付随した用水であったとも考えられる自然湧水、「首洗いの池」がある。名前の由来は白井氏の郎党が敵兵



出張市



多家神社



首洗いの池

の首をここで洗って葬ったことによる。もとは飲料水として使用されていたが、現在は利用されておらず、フェンスで囲まれ中には入れない。水はやや汚れ、鯉が数匹飼われていた。

出張城の下あたりから多家神社にかけては、かつて「出張市」と呼ばれる町並みがあった。正徳・享保期（二七一―一七三五）の「芸備諸郡駅所市町絵図（城東・巻六）」によれば、賀茂郡より安芸郡の下瀬野・畑賀を経て矢賀・広島に至る往還の一つとして町の長さが一一五間（約二〇八メートル）あると記録されている。

図によると通りに面した出張市の家並みを中心に、お首・沖・大崎・石井城や中郷（砂原）・山田などの聚落が描かれており、また出張市から裏の田畑に通じる小路には、「尾首小路」・「濱小路」・「田中小路」などが記入されている。

この出張市が正徳・享保期に「市」としての機能を果たしていたのかどうかは明らかではない。

かつての「出張市」もいまは落ち着いた静かな住宅街で、人通りも少ない。

しばらくいくと川沿いの大きな通りにでる。その手前右に石の大鳥居、そして、その奥に高い石段が見える。多家神社である。

多家神社は神武天皇を主神とし、五〇余人を祀る。埃宮（えのみや）の名前でも親しまれており、旧県社である。

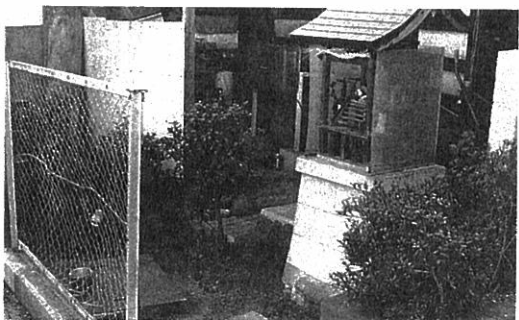
式内社多家神社は永く所在が不明であったが、十七世紀末に府中の総社と松崎八幡宮とが互いに式内社を主張して争いが生じ、両社の対立は村民を二分して一〇〇年近くも続いた。両社とも多家神は自社に祀られているとして譲らず、明治四年、旧藩主浅野氏は両社とも廃して、両社のほぼ中間にある「誰曾（たれそ）の森」に両社を合祀し、多家神社とした。なお、宝蔵の屋根は桧皮葺の入母屋造りで、中にある神輿とともに県指定重要文化財である。また、多家神社の社叢は府中町の市街地に残



ムクの大木



龍仙寺



今出川湧泉



総社跡

された数少ない自然のひとつである。

多家神社の道を道路を隔てて流れる川は榎川である。この道路を川沿いに少しばかり上流に歩き、寺山橋を渡るとすぐ右手に龍仙寺がある。

この寺は府中村最初の小学校である開明舎の所在地でもある。学制発布の翌年（明治六年）に生徒約二〇名を本堂に収容し発足した。当時の指導教科は、読書・習字の二科目のみであった。

さらにいくと今度は左手に総社跡の石碑がある公園が見えてくる。

この総社は安芸国の総社であり、応徳年間（二〇八四～一〇八六）の免田帳に「総社」の名が記されており（『芸藩通志』巻三九、それ以前に勧進されたことは確実である。鎌倉時代にも数か所の免田を持ち、春秋二季の神楽料に宛てられた田も確認できる。さらに、南北朝初期、建武二年（二三三五）の雑訴決断所の公文書によれば、総社御神楽免田米の支配が田所氏に認められるなど、国庁奉斎の神社として栄えたことがうかがえる。ここは安芸国府比定地の東辺にあたる。

総社跡の西隣に大きなムクノキがある。樹高二七・五メートル、胸高幹囲は四・七メートルあり、府中町指定天然記念物である。私有地であり、根元には小さな祠がある。昔、船が沖から帰ってくるとき猿猴川の河口に近づくとき北方にこのムクノキが良く見えたと言えられる。

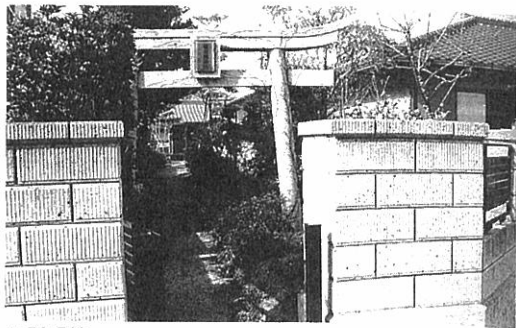
このムクノキの南約五〇メートル、宮崎商店の庭先に現在は鉄の板でおおわれている湧泉がある。今出川湧泉と呼ばれ、かつては飲料水として利用され、共同洗場でもあった。ここからおよそ一〇〇メートル北西には出会清水がある。こちらは今も近所の人達に共同利用され、親しまれている。地元の人々は「東川の泉」と呼んでいる。

この湧泉は環境庁の「名水百選」にも選ばれている。古歌に「安芸の国府出会清水に今出川温品風いつもはけしき」とある。

総社跡のすぐ西方に国庁跡が残っており、現在も田所氏の子孫が居住し、その一隅に田所明神という小祠がある。



埃宮橋



田所明神



辻道祖神



多家神社から府中大橋にかけての松並木

総社跡からさらに川沿いの道を上り切るとそこは、榎川の水源地、水分峡である。再び、多家神社の前まで戻る。そこから南東方向、榎川沿いの府中大橋にむけての道路端の所々にはかなり古い松の並木が見られる。榎川左岸の自然堤防を利用したこの道もおそらく新しい山陽道ができると同時に作られたものと考えられる。松の数は四八本である。

昭和三年建造の古いコンクリート製の埃宮橋を渡って北上する。

埃宮橋から府中変電所にかけての道は、かつて「大道（おおみち）」と呼ばれていた。平安末期及び鎌倉中期の田所文書によると、しばしば「大道」と記載されているのがおそらくこれであろう。

この道は安芸国衙方四町の西側の基本線と一致するのではないかとはいわれている。

埃宮橋から約三〇メートル、右手の道端に、石地蔵を祀った辻道祖神がある。別名、疣神社または導神社。この位置は安芸国衙方四町の西南隅に当たる四辻のひとつであり、「辻のいばおとしさん」の呼び名で信仰されており、この付近も辻という集落である。

正徳二年四月安芸郡府中村寺社堂古跡帳に「いば落と申石仏御座候立像御長一尺楠一本松一本御座候先年よりいばおとしと申伝導の脇に御座候外に何の申伝えも無御座候」とあり、さらに古く鎌倉中期の田所注進状に「辻道祖神免二反」とあり、このことではないかと思われる。祠の横に大きな楠の朽木が置かれている。

この通りは現在では道幅の狭いバス通りであり、道の両側は古い住宅街や商店もあるが、比較的新しい食堂・喫茶店さらには新築のマンションなども見られる。

さらに行き、石井城のバス停から少し東に入ったところに下久禰の石灯籠がある。これは海上交通の常夜灯であったと思われる。

碑に「常夜灯。金比羅大権現。天保十二年五月。北郷連中」と刻まれている。北郷とは石井城・安養寺・岡田などこの付近の字名である。古



薬師の祠



大道



早馬立



下久禰の石灯籠

老によると岩鼻からキリンビル前・土橋を経て船越に至る西国街道からもこの燈火が見えていたという。

さらに行くと右手に小祠がある。薬師の祠という。現在のものは大正昭和の初めに某住民の霊夢により再建されたものという。この位置は安芸国衛方四町の西北隅に当たるとされている。

薬師の祠からさらに北上すると「城ヶ丘入口」のバス停がある。右に折れると道は登りになる。この辺りは高尾山から南西に延びる丘陵の先端にあたり、古代および中世の建物遺構である下岡田遺跡がある。この遺跡、古代の官衙跡であることはほぼ間違いないが、国衙とみる説と駅館（安芸駅）とみる説とがある。

この辺りは早馬立（はやうまだち）と呼称されていた。古くは早馬館と記されていたと思われ、文化十二年（一八一五）の『芸藩通志』所載の府中村地図に記載されている。江戸末期まで呼称され、古代安芸駅の異名と考えられる。

府中から旧山陽道が温品を通過する道筋を「延喜式」（九二七年）により推定すると、船隠―金碓明神―長伝寺跡―金剛寺跡―清水（温品小学校庭）―室屋（一中山へ）と、当時の汀線沿いであることがわかる。またこれにより古い道筋として、瀬野―畑賀―馬木のいわゆる「呉婆々宇越えの道」があったのではないかとわれている。

旧山陽道を府中から温品に入る。

府中と温品との境近くに、かつて今は中国電力の社宅の造成でなくなっているが、鶴江山があり、その北側を船隠（ふなかくし）と呼んでいた。この地名は現在残っていないが、『芸藩通志』の村里の項には「また船隠とよぶ地もあり。古の舟入ならんや」とあり、船隠には舟の碇泊所の意味がある。

さらに北に隣接する鶴ヶ台団地と長伝寺団地に囲まれた地区を金碓と呼ぶが、同じく『芸藩通志』の村里の項には「東西山塞ぎ、西南の際



間所



水尾水道跡



長伝寺付近

は入海なりよし、金碇とよぶ地往年鉄錨を掘出せしといふ……」とあり、かつてこの付近が海岸線であり、港もあったことをうかがわせる。後述する字長伝寺には金碇明神があり、厳島神社の祭神である市杵比売命（いちきしまひめのみこと）を祠っている。

この神社の北隣に廃長伝寺（別称長善寺）がある。近くには五輪塔数基があり、付近には清水跡もある。「温品記」（寛政十年）では長伝寺は温品長善の建立とし、温品氏の菩提寺としている。

この南に隣接し、現在は安芸府中道路（ぬくしなバイパス）が通っている付近に磯合（そうわ）という字名で呼ばれている地区がある。これは海の入江の意味であり、この辺りで弥生時代後期の貝塚が発見されている。海岸線がさらに谷の奥まで入っていたことがわかる。

温品川にかかる金碇橋を渡る。左手に広がる低地、このあたり（温品一丁目および四丁目）の字名を間所（まどころ）という。

『芸藩通志』の村里の項には「……基地一段許は、今に深泥幾丈を知らず、耕種牛を入れることを得ずいふ……」とあるとおり、このあたり、もともと温品川の氾濫原で、今でも排水不良地である。沼所（ぬまどころ）が転訛して、「まどころ」となり、当て字により間所となったといわれる。

現在はほとんど工場ないし住宅地となっているが、この地区の市街地化は遅れ、昭和三十八年の旧安芸町の管内図では住宅は国鉄官舎を除き、まだほとんどみられない。

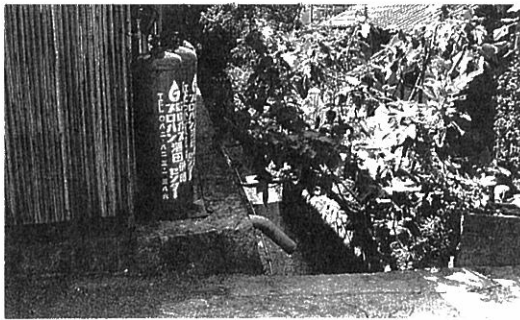
このあたり一帯はかつて藩主の鷹野であり、長い間砂入れができなかったこともその理由のひとつである。かくて間所の排水と典型的な天井川である温品川の川掘りがたえずおこなわれることとなる。

間所の排水をよくするために作られた水路を水尾（みお）水道という。

鶴江橋から府中町の浜の尻橋あたりまで温品川の中に土手をはさんで二本の川が平行して流れているが、西側の細い川が水尾水道である。二本の川は下流で合流している。この水道は安永三年（一七七四）に完成し、



万休寺前の旧山陽道



古川

その時の長さは二七五間（五〇〇メートル）で、万延二年（一八六二）に二八〇間（五〇九メートル）を延長している。

温品川沿いの道をしばらく行くと砂原の三叉路となる。この二本の道にはさまれたところを中島という。ここは天保七年（一八三六）の大洪水で、温品川が氾濫し、流路が変更した結果できた新しい川道（新川）と古い川道（古川）にはさまれた「島」の部分であり、中島と呼ばれるようになった。

古川は再度の大出水を考慮し、長く手が加えられなかったが、大正八年に埋め立てられ用水溝となり、現在に至っている。

砂原の三叉路の左の道を行くと再び、三叉路に出る。

この三叉路の道を行くと中山の万休寺の前を通り、中山に至る。

（和田 文雄）